

建築家の

往復書簡

原広司 — 磯崎新

11
.....

人間は、同時に、
異なつたふたつの道を
歩くことができるか

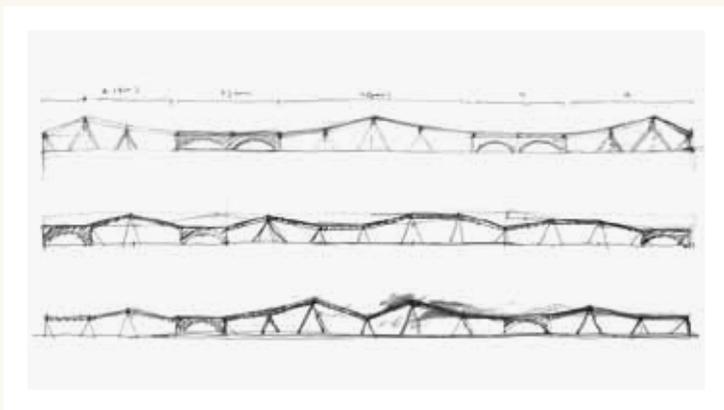
磯崎新様

Hiroshi Hara

原広司

『ビルディングの終わり、アーキテクチュアの始まり—磯崎新+浅田彰』鹿島出版会(二〇一〇)の著作をお送り頂き、ありがとうございます。当代きつての論客のおふたりが、さらびやか、幻想的、それ故、^{こぼれ}惑的な世界を開示されており、一気に読ませて頂きました。おおむねは、存じあげていましたものの、相当に知識がないと読みこむことは難しく、

学習しなくてはならない点が多々あります。「世界の成り立ち」をARCHITECTUREとしたことも、正直なところ感づいたのですが、まあよかつたのではないかと思っています。世の中には、リアリストと、そうでない人がいる。まあ、傾向の強さの話ですが、後者は細分されていて、そのなかに「魔法」を信じるタイプの人があると、私はかねがね思っています。



ハノイ市地下鉄2号線の高架駅のヴァリエーション[図版提供:アトリエ・ファイ建築研究所]



9011152990

LIXIL
Link to Good Living

株式会社 LIXIL

トステム・INAX・新日軽・サンウエーブ・TOEXは、株式会社LIXIL(リクシル)の製品ブランドです。
株式会社LIXILはお客様の多様なニーズにお応えする商品とサービスをお届けしていきます。

「魔術」といってべきでしょうか。実は、私もそれに憧れているひとりですが、おふたりは、魔術師のように語られる。その呪文は、秘儀にあたるので、詳しいところは解る筈がない。しかし、頂いた本を読めば、建築と哲学が歴史の時空を飛び交う様が描出されていて、そこには極めて特異な世界が現われていることは誰にでも解るでしょう。でも「魔法」の所在を信じていないと、無理なかもしれませんね。

磯崎さんが、リアル／アンリアル／虚構という把え方をしておられることもよく解りました。建築は、なにもない所に、建築を出現させるわけですから、初源から魔法にかかわっている筈です。それに先行して、私たちが生きてきた、生きていること自体、魔法にかけられているとしか思えません。私は、数年前に、人の動く経路の記述を学習している折、人の一生の経路が二筆書き(閉曲線とは限りませんが)であることに、あらためて気づきました。そうした経路に関する物理的事態に

原広司 学見

原さんが、可能世界、あるいは平行世界、リアル／イマジナリ、という表現もできますが、数学的に組み立てられた世界を扱おうとされている、それが建築家・原広司を成立させてきたのではないかと、問いかけたのが、この往復書簡をはじめた私のひとつの理由です。このやりかた——あえて数学的思考と記します——は私には手がとどかない、無理だ、と自覚していました。

まあ今日でいうと偶有性ですか、いつまでたってもカオスのまんまに、人間の生もまたその渦に巻き込まれている状態としてあり、たえず破綻していくロジックとでもいうものにとらわれつけ、むしろこのイメージの記述法にひかれていて、破れかぶれてやろうという構えだったので(原さんは、これを「非ず、非ず」で片付けました)。

そのうち、カオスとみたものは言語的な認識は不可能であって、それを数学という鏡像に映しとって理解しているにすぎないという、これまた近代の形而上学に惑わされ、混乱に陥る。私たちが共に「文化の現在」グループにいた頃、この関係は文化人類学と構造主義において論じられていました。この時、原さんはフィールド・ワークにでて世界の集落調査をやられた。私にはその対象にあるのは事実としての力

対して、異議申し立てをしなくてはならないと考えるようになりしました。そして、リアルワールドとイマジナリワールドを同時に生きる人間の在り方について、なんらかの記述法があるのではないかと、思うようになったのです。

単純な話が、「人間は、同時に、異なったふたつの道を歩くことができるか」という単純な問いになります。この疑問形の命題は、最近情報技術の展開により、リアルに感じられるようになっていとも思えます。しかし、少なくとも二〇世紀の芸術の課題でもあった。ジエームズ・ジョイスは、この問いをストリートに描出し、T・S・エリオット、あるいはホルヘ・ルイス・ボルヘス、さらには大江健三郎が、想像力の所在と描出の方法を提起しました。建築では、磯崎さんが際立ってこの問題にとり組んできたことが、浅田さんとの話から推測できます。世間では、文学はフィクションであり、建築はリアルだと思われているところが、面白いところです。そして、リアリストた

私たちが建築を学びはじめた頃に、日本の近代化の路線は確立されており、敗戦のあとのあらゆる施策がこの一本線で動きはじめていました。自明の理でした。それが「近代建築」といまでは歴史的に位置づけられているモダニズムの受容だったし、国家的テクノクラートも同一步調をとっていた。私たちの求めていたのは、そんな大枠のなかであって、近代の原理として教えられたことの核心をあらためて疑っ

オスとみえるのに、原さんは数学的に構造が説明できる。つまり鏡像を数学とみるかその裏の自然の側からみるかのちがいにすぎないとしても、私は制御不能のモノ自体にこだわりたい。建築や都市の工事現場が私にとってのフィールド・ワークの場であったためかもしれません。これらの現場ではいかに統制されているとしても、予測不能の事件の連鎖です(こんな説明も、いまでは、非線形モデルで解けるのだよ、といわれるでしょう)。

その鏡にあたる事象を、マルセル・デュシャンが「極薄」アン・フランソと呼んだメモが、彼の死後にみつかりました。「あんなのかないのか説明できないけど、存在していると信じている人がある。そんなものだよ」と、にたうと笑う顔が浮かびます。原さんが「魔術」としているもので、私は信者のひとりて

ちが考えそうな間違いが、実は建築が「世界の成り立ち」にかかわってゆくことができる道すじなのです。

この一見あやしい命題を肯定的に書き直し、それをもって人間の存在を定立し直さない限り、広い意味で、人間は救われない。巧くゆかないにしても、問題を一般化すること。

二〇世紀の革命に見る通り、魔術師たちの美しい予告を、リアリストたちが「右」「左」関係なく、よつたかたて、めっちゃくちゃにするのが、世の常です。まあ、それはともかく、問題の所在は、一応単純化できましたので、多少なりとも、武装してみたいと考えています。

二〇二二年十一月四日

原広司

ARJI ISOSZKI

磯崎 新

とみることから出発することだと思っています。原さんは『建築に何が可能か』(学芸書林一九六七)を書かれた。そのロジックは近代の科学的合理性で貫徹している。数学的思考と私という理由です。

私は同じく建築を思考しながら、画家のジャクソン・ポロックや作曲家のジョン・ケージの仕事に関心をもっていて、都市を、不意の出来事、思いがけない事故、不確実な変動、

す。私の理解するところでは、「極薄」とは浸透膜の一種で、自然カオスがその時の気分てにじみてくる。だけどころなるロジック数学も制御できない。「魔法」というしかない。「極薄」を介してのやりとりを神話と呼んでいたのではないかと私は考えています。レヴィストロースが構造化した神話とはちがいます。訓話学や考古学で参照される神話ともちがいます。ふだんは眠っていて、時々眼をさますのです。この為体の知れないモノは複雑系のカオスともちがう、中国では「渾沌」と記されてきたモノに近い。そこで、私は数学的思考にたいして神話的思考と呼びたいと考えているのです。無根拠です。オウムが唱えていたマントラとどこがちがう、といわれそうです。だけど、「莊子」の定義した「渾沌」を無視することはできません。

南海之帝為儻 北海之帝為忽 中央之帝為渾沌

儻與忽時相與遇於渾沌之地 渾沌待之甚善

儻與忽謀報渾沌之德 日 人皆有七竅 以視聽食息

此獨無有 嘗試鑿之 日鑿一竅 七日而渾沌死

『莊子—應帝王編』

二〇二二年十一月二十三日

磯崎新



古代 首都は神話的構造線(熊野—若狭ライン)を北上[図版提供:磯崎新アトリエ]

はらひろし——建築家一九六六年生まれ一九六四年、東京大学数物系大学院建築学博士課程修了。一九六九年、東京大学生産技術研究所一九九七年、退官、同名教授。一九七〇年よりアトリエ「アトリエ建築研究所」と設計共同。一九九九年より原広司「アトリエ」建築研究所所長。いそざきあらた——建築家一九三三年生まれ一九六六年、東京大学数物系大学院建築学博士課程修了。一九六三年、磯崎新アトリエ設立。